

『トリアージ ～金の瞳の異邦人～』

著: 春原いずみ

ill: 高群 保

「決して眠らず、ドアを閉じることすらしない君が、なぜ、現場放棄をしたのかな」

「放棄なんか……していない」

「したろう？ 君は患者を放り出した」

「放り出してなんか……いない……っ」

声に強さが戻ってきた。震えが少しずつ少しずつおさまっている。齋川の中にいるもうひとりの彼がゆらりと身を起こしたのを感じる。

「あの患者は……僕に診られたくないと言った。僕に診られるくらいなら……死んだ方がましだと言った。助かる命も助からないと言った」

口調が変わっている。声が通り始める。鳶の唇が微笑んだ。

“お目覚めかい？ 阿修羅王殿”

「誰も他にいないのなら、力づくにでも僕が治療をする。しかし、あの場には白石先生がいた。彼なら、僕と同じだけの救命救急医としての技量を持っている。だから、患者が望むようにした。患者の生きる力をそがないのも、救命救急医としての務めだ」

彼の手が視界をふさいだ鳶の手にかかった。滑らかな手だ。そして、そのまま、驚くような力で鳶の手を引き剥がす。振り向いた瞳は金色に輝いていた。

「鳶先生」

「はい、名前を覚えていただいて光栄だね」

「あなたはいったい何がしたいんですか」

「とりあえずは君を現状復帰させることかな」

「別にあなたにどうこうされなくても、必要と思えば戻ります」

凜と澄んだ声。金色の瞳。宝冠を戴く美しき阿修羅王が目覚めたのだ。鳶はふっと唇を歪めて笑った。

「それは失敬。昼寝を決め込んだ君を揺り起こすには、少々乱暴な手も必要かと思ったのでね」

彼の手にとられたままだった右手をくるりと返して、逆にその手を掴(つか)み、思いきり引き寄せる。

「何を……っ」

軽い身体だと思った。ふわりと柔らかく鳶の胸に倒れ込んでくる。くっつと細い顎を掴んで、その蠱惑の瞳をのぞき込んだ。

「……なるほど」

“怯えた子猫を救い出すために、阿修羅王が目覚めたか”

少なくとも、阿修羅王と呼ぶ人格の記憶は途切れていないようだが、かなりはっきりとした人格交代だ。これは振り幅の大きいオンとオフの性格というには、あまりに極端にすぎる。これは性格というより、人格と言っていいだろう。

「……おもしろい」

それなら、自分もその仲間だと鳶は思う。

鳶の中には、冷静で知的にすぎる性格の他に、めったに姿は現さないものの、恐ろしいほどに破壊的で破滅的な獣が隠れているのだ。

「何が……っ！」

「いや、怒った君もなかなか魅力的だということだよ」

さっと振り上げられた手を再び簡単に掴み止めて、鳶は彼の自由を奪う。両手を背中できつく握り、彼の瞳を見つめる。漆黒の闇に、金色の輝きが吸い込まれていく。この獣が走り出したら、優秀なカウンセラーである鳶自身にも制御は難しい。

「……っ！」

重ねた唇はふんわりと柔らかい。しかし、固く結ばれたままだ。それをまるでおもしろがるように、鳶は強引に顎にかけた指と舌先で割り開いていく。

暴走は止まない。こんなことをしていいのかと問いかける知的なカウンセラーを本能の獣が一蹴する。

“こんなに……俺をそそる存在があるか……？”

「ん……っ」

微かな声が漏れる。逃げる舌先を追いかける少し淫(みだ)らなゲームを鳶は楽しんでいた。

鉄壁の理性を叩き壊せる存在には、めったに出会えない。肌もあらわに誘われるより、彼の瞳の方がずっとずっと鳶の狩猟本能を刺激する。

“さて……今の君はいったいどの君かな”

両腕をまるで縛るように拘束されて、齋川の身体が跳ねる。本当に嫌がっての抵抗なら、あっさりと逃がしてあげようかとも思ったが、これはそうではないと判断した。いくら見かけは華(きゃ)奢(しゃ)でも、鳶ですら息の上がるCPRを、彼は淡々と何サイクルでも続けられるだけの体力と力を持っているのだ。そんな彼が思い切り抵抗したら、青白きインテリカウンセラーなど、吹っ飛ばされてしまうだろう。

手首を掴んでいた力を少しゆるめて、身体全体を包み込むようにして抱きしめる。唇が濡れるほどのキスはまだ解かない。

狩ってみたい。ほら、もっと逃げて。

“肌が……少し熱いかな”

身体全体ですっぽりと包んでしまうと、彼は驚くほどおとなしくなった。背中を抱いていた腕をそっとずらして、滑らかな髪に指を滑り込ませ、こめかみから撫(な)で上げるようにしても、ただされるがままだ。しかし、キスに甘く溺(おぼ)れているわけではないことが、その唇の冷たさとぎこちなさでわかる。

“なるほど……人形……か”

明るい栗色の髪の滑らかさと術衣越しの肌の温かさがなければ、まるで美すぎる人形を抱いているような気分だった。意外に柔らかい唇は決してくちづけに応えることはなく、探り当てる舌先は逃げることもない代わりに、甘く絡ませてくることもない。

“……謎……だな”

どれほどそうして抱き合っていたのかはわからなかった。ずいぶん長い間だったような気もするし、とてつもなく短かったような気もする。

「ん……」

微かな声を漏らして、彼が小さく身じろぎをした。ずっと閉じられていた瞳が開かれ、すうっと視線が滑る。と、次の瞬間、鳶は再び彼の行動に驚かされる。突然、突き飛

ばされるような勢いで、彼が腕の中から飛び出していったのだ。

「……」

ドアに思い切りぶつかって、まるでマンガのように跳ね返されてから、彼はようやくノブを回して、部屋を駆け出していく。

「は、はは……」

デスクに突き飛ばされ、そこに寄りかかったまま、鳶は低く笑っていた。

ようやく獣の暴走はおさまり、カウンセラーの知的な思考力が戻ってくる。

「これは……おもしろすぎないか……」

机上の多機能電話で光っている赤いランプは、救急直通電話の入電を示している。

「あのどさくさでも……これだけは見えてたってことか……？」

情緒もへったくれもない……ある意味おもしろくもおいしくもないキスでも、鳶は妙に高ぶっている自分を感じていた。

「揺さぶるつもりが……揺さぶられてるか……」

くっくと笑い続けながら、クライアントを癒しながらも、自身がいちばん壊れてしまっているという自覚のある凄腕カウンセラーは幾度も頷く。

「それも……おもしろい」

風に乗って、すでに聞き慣れてしまった救急車のサイレンの音が聞こえ始めていた。

本文 p90～97 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>